



特

門 5
號 8329
卷 12



Handwritten text in cursive script (草書) on the left page of an open book. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

五七

を授けしやふに於て少くも一は二に於て三は四に於て五は六に於て七は八に於て九は十に於て十一は十二に於て十三は十四に於て十五は十六に於て十七は十八に於て十九は二十に於て二十一は二十二に於て二十三は二十四に於て二十五は二十六に於て二十七は二十八に於て二十九は三十に於て三十一は三十二に於て三十三は三十四に於て三十五は三十六に於て三十七は三十八に於て三十九は四十に於て四十一は四十二に於て四十三は四十四に於て四十五は四十六に於て四十七は四十八に於て四十九は五十に於て五十一は五十二に於て五十三は五十四に於て五十五は五十六に於て五十七は五十八に於て五十九は六十に於て六十一は六十二に於て六十三は六十四に於て六十五は六十六に於て六十七は六十八に於て六十九は七十に於て七十一は七十二に於て七十三は七十四に於て七十五は七十六に於て七十七は七十八に於て七十九は八十に於て八十一は八十二に於て八十三は八十四に於て八十五は八十六に於て八十七は八十八に於て八十九は九十に於て九十一は九十二に於て九十三は九十四に於て九十五は九十六に於て九十七は九十八に於て九十九は百に於て

一は二に於て三は四に於て五は六に於て七は八に於て九は十に於て十一は十二に於て十三は十四に於て十五は十六に於て十七は十八に於て十九は二十に於て二十一は二十二に於て二十三は二十四に於て二十五は二十六に於て二十七は二十八に於て二十九は三十に於て三十一は三十二に於て三十三は三十四に於て三十五は三十六に於て三十七は三十八に於て三十九は四十に於て四十一は四十二に於て四十三は四十四に於て四十五は四十六に於て四十七は四十八に於て四十九は五十に於て五十一は五十二に於て五十三は五十四に於て五十五は五十六に於て五十七は五十八に於て五十九は六十に於て六十一は六十二に於て六十三は六十四に於て六十五は六十六に於て六十七は六十八に於て六十九は七十に於て七十一は七十二に於て七十三は七十四に於て七十五は七十六に於て七十七は七十八に於て七十九は八十に於て八十一は八十二に於て八十三は八十四に於て八十五は八十六に於て八十七は八十八に於て八十九は九十に於て九十一は九十二に於て九十三は九十四に於て九十五は九十六に於て九十七は九十八に於て九十九は百に於て

15月

一徳 八喜人

神保田 四郎

三橋 卯次郎

田中 土佐五

小原 宗右衛

此の事は...

此の事は... 徳之方... 神保田... 田中... 小原... 卯次郎... 土佐五... 宗右衛... 徳之方... 神保田... 田中... 小原... 卯次郎... 土佐五... 宗右衛...

戸後台古より上は後
清純寺より上は後

二月廿

西廊 西本堂
一 漆 要人
非保内 漆

三 杉 木 柱 皮
四 杉 木 柱 皮
少 木 漆 皮
一 漆 木 柱 皮

井原 漆 皮
内 友 漆 皮
菅 漆 皮
上 田 漆 皮

徳川内田武八物次郎市兵衛一海。前記の如く
著し味洋海。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

一。一。一。

一。一。一。

一。一。一。

一。一。一。

三。三。三。

四。四。四。

少。少。少。

一。一。一。

并。源。一。一。一。

内。友。一。一。一。

子。子。一。一。一。

上。上。一。一。一。

江戸幕府定例の如く、海防の要として、
通商口岸の警備を厳重にし、
了り、何事にも、
り、
勢を為すに、

方一更難不推名由人於新内名口海解
心口狀十事之大難也力中相及中節情
為名物也十牛人方一内口口口口口口口
以也心口口口口口口口口口口口口口口
口口口口口口口口口口口口口口口口口
口口口口口口口口口口口口口口口口口
口口口口口口口口口口口口口口口口口
口口口口口口口口口口口口口口口口口
口口口口口口口口口口口口口口口口口
口口口口口口口口口口口口口口口口口

二月廿

西戶
要人

神律四物也

多務 西行
田中 右行
少宗 宗女
二階 宗女
井深 宗女
内家 宗女
室井 宗女
上白 宗女

あし中を父様とておぼせし
御もあし月中おぼせし
まはし

あし中を父様とておぼせし
御もあし月中おぼせし
まはし
あし中を父様とておぼせし
御もあし月中おぼせし
まはし
あし中を父様とておぼせし
御もあし月中おぼせし
まはし

いふ事なるを成すべしと云ふ事は、
此の如く、
不測の事なるを成すべしと云ふ事は、
此の如く、

九月九日
小田 山本

山本 山本
山本 山本

山本 山本

山本 山本

いふ事なるを成すべしと云ふ事は、
此の如く、
不測の事なるを成すべしと云ふ事は、
此の如く、

予の母は人の子を養ふに心を尽せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに

十月十日

此の書は人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに

上は予の人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに
忠なりけるを以て人の子を養ふに心を盡せしむるに

十一月十日

三十一

多分は成しむるに便し命に成すは
中にも多かるる所は成すに便し
成すに便し命に成すは
成すに便し命に成すは

成すに便し命に成すは

三十一

山は成すに便し命に成すは
成すに便し命に成すは
成すに便し命に成すは
成すに便し命に成すは

成すに便し命に成すは

三十一

成すに便し命に成すは
成すに便し命に成すは
成すに便し命に成すは
成すに便し命に成すは

少成中... 一持... 佛... 列... 中... 於... 也...

伊奈言在極一皮是後未之有之極
 以是道向一皮今未此年此後若之有之極
 之有之入一皮も如之有之極之有之極
 以是切也之有之極之有之極之有之極
 口氣之有之極之有之極之有之極
 口氣之有之極之有之極之有之極
 一皮之有之極之有之極之有之極
 伊奈言之有之極之有之極之有之極
 之有之極之有之極之有之極之有之極
 之有之極之有之極之有之極之有之極

十月十日

小原 朱丸

田中 士修

了持 外紀

神保國記

了持 外紀

伊奈言在極一皮是後未之有之極
 以是道向一皮今未此年此後若之有之極
 之有之入一皮も如之有之極之有之極
 以是切也之有之極之有之極之有之極
 口氣之有之極之有之極之有之極
 口氣之有之極之有之極之有之極
 一皮之有之極之有之極之有之極
 伊奈言之有之極之有之極之有之極
 之有之極之有之極之有之極之有之極
 之有之極之有之極之有之極之有之極

十月十四日
十月十五日
十月十六日
十月十七日
十月十八日
十月十九日
十月二十日
十月二十一日
十月二十二日
十月二十三日
十月二十四日
十月二十五日
十月二十六日
十月二十七日
十月二十八日
十月二十九日
十月三十日

内友
十月十四日
十月十五日
十月十六日
十月十七日
十月十八日
十月十九日
十月二十日
十月二十一日
十月二十二日
十月二十三日
十月二十四日
十月二十五日
十月二十六日
十月二十七日
十月二十八日
十月二十九日
十月三十日

一瀬
十月十四日
十月十五日
十月十六日
十月十七日
十月十八日
十月十九日
十月二十日
十月二十一日
十月二十二日
十月二十三日
十月二十四日
十月二十五日
十月二十六日
十月二十七日
十月二十八日
十月二十九日
十月三十日

十月十四日
十月十五日
十月十六日
十月十七日
十月十八日
十月十九日
十月二十日
十月二十一日
十月二十二日
十月二十三日
十月二十四日
十月二十五日
十月二十六日
十月二十七日
十月二十八日
十月二十九日
十月三十日

十月十四日
十月十五日
十月十六日
十月十七日
十月十八日
十月十九日
十月二十日
十月二十一日
十月二十二日
十月二十三日
十月二十四日
十月二十五日
十月二十六日
十月二十七日
十月二十八日
十月二十九日
十月三十日

十二月廿日

城西の乳母書に於ては、
上と云ふ名は、少くは、
名は、大に、北の、
二月廿日

杉の、
以て、
清和の、
清和の、
清和の、

十二月廿日

四月廿日
井原
少

田中三法
言物如記

神保の成書及
一床五つ及
二軒の書及
三軒の書及
上の書及

神保の書及
一軒の書及
二軒の書及
三軒の書及
上の書及

神保の書及
一軒の書及
二軒の書及
三軒の書及
上の書及

神保の書及

神保町

三ノ目

ノ目

ノ目

神保町

ノ目

ノ目

神保町

ノ目

ノ目

以成此也... (Main text in cursive script on the right page)

十三日

ノ目

六三九

一休あり及
二つあり及

注ありとありとあり

あり

七三九

八三九

一休あり及
二つあり及

注ありとありとあり

あり

六三九

一休あり及
二つあり及

中江相陸運軍大川を舟に三谷を舟に江守を舟に
河守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に
舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に
舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に

十月

舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に

光

舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に

舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に

舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に舟守を舟に

海之島上は山にけしきあり
神皇正統記

上りて

井原為重

一瀬高直

田中一玄

三橋外紀

神保内為助

一瀬要人

内友とて

西卿 文章後

上田 一学

浪書可成格行 神皇正統記の巻の序の巻に

信長公の御書 一巻 三巻の巻の序の巻に

神皇正統記

上りて

神皇正統記の巻の序の巻に

神皇正統記

上りて

かゝる如くして評判を以てたし不令馳せ
るるも少老之存希抄に以て中保の事
平一高ふと云ふに由る
所と叙るる如くは少老之存希抄に以て
力との門際を如く書するも止りたを以
上納と念ずればはるる少老と云ふ事
竟る也

所在宗山の動に於て事の一述

公道一と忠節を以て言及と以て終る
は終り及なく九と九と力と動却る何と云ふ如く

氣も又と終る少老之存希抄に以て
る所宗一宗師を以て終るの事終るに
とわす生れし以て終るの事終るに
しりし事一以て終るの事終るに
先醒も終る一以て終るの事終るに
し況るは終る一以て終るの事終るに
事一以て終るの事終るに
終るも終る一以て終るの事終るに
完大し終る一以て終るの事終るに
了るも終る一以て終るの事終るに

三月十一日... 奉命... 奉命... 奉命...

三月十一日... 奉命... 奉命... 奉命...

三月十一日... 奉命... 奉命... 奉命... 奉命... 奉命... 奉命... 奉命... 奉命... 奉命...

従つて之より高き素直を以て女は男より高きを救ふべし
計り多しきものをもて之は好むに計を立てらんともおもは
む計り多しきものをもて之は好むに計を立てらんともおもは
ふ者ありきなりき

はさすをたふさすに入らざりて後縁の爲に計り多しき
おし下をたふさすは元るもの計り多しきなりき
これもちかぢり中へ押す物も之は好むに計り多しきなり
あかし

又女も男の心をもたへしとて女は男より高きを救ふべし
はさすをたふさすは元るもの計り多しきなりき
これもちかぢり中へ押す物も之は好むに計り多しきなり
おし下をたふさすは元るもの計り多しきなりき
これもちかぢり中へ押す物も之は好むに計り多しきなり
あかし

西の所は物言さず一たし母に事いふ方より元は
正なる事の中にもあはれぬ所は行ふ所は
世に口波らる所は口を以て物言ふ事
の故を言ふ事には言ふ物言ふ事
の言ふ事には言ふ物言ふ事
の言ふ事には言ふ物言ふ事

は生れぬ事の中にもあはれぬ事の中にもあはれぬ事
の言ふ事には言ふ物言ふ事
の言ふ事には言ふ物言ふ事
の言ふ事には言ふ物言ふ事

とある事の中にもあはれぬ事の中にもあはれぬ事
の言ふ事には言ふ物言ふ事
の言ふ事には言ふ物言ふ事
の言ふ事には言ふ物言ふ事

十二月廿四日

口行とあるは... 多し... 後... 併... 上... 上... 事... 事...

一... 事... 事... 事... 事...

事... 事... 事... 事... 事... 事... 事... 事... 事... 事...

とくし... 細減... 花... 子... 子... 子...
た... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...

とくし... 細減... 花... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...
... 子... 子... 子... 子... 子...

二月

さかふふてのちかふといふはたけさしづかしくいふに
いふかのはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
いふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて

はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて

はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて

たかふてはたかふて

はたかふてはたかふて

はたかふてはたかふて

はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて
はたかふてはたかふてはたかふてはたかふてはたかふて

三月

皆天始之交代也

二十月六日之交代也

一 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
二 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
三 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
四 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
五 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
六 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
七 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
八 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
九 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極
十 生若動者之向一正一水注之向一其傳之極之極

大正十一年一月一日
東京市神田区
本町二丁目
大正十一年一月一日
東京市神田区
本町二丁目
大正十一年一月一日
東京市神田区
本町二丁目

大正十一年一月一日
東京市神田区
本町二丁目

大正十一年一月一日
東京市神田区
本町二丁目

大正十一年一月一日
東京市神田区
本町二丁目

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note. The text is written in a fluid, connected style across several lines. The characters are dark and the ink is slightly faded in some places. The text appears to be a mix of letters and numbers, possibly a code or a specific dialect of a language.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the opposite page. This text is more densely packed and appears to be a continuation of the same or a different piece of writing. The lines are closely spaced, and the overall appearance is that of a formal or semi-formal document.

Handwritten text in cursive script, likely a signature or a short passage.

1922/10

Handwritten text in cursive script, likely a signature or a short passage.

一日、夜、雨、降、り、て、山、の、代、り、雨、の、音、が、聞、こ、え、る。

と、い、ふ、は、な、ら、ず、

心、紙、の、中、に、書、き、置、く、事、も、亦、有、り、

清、水、堂、の、詩、の、中、に、亦、有、り、と、い、ふ、は、な、ら、ず、

大、山、の、代、り、代、り、と、い、ふ、は、な、ら、ず、切、白、の、後、

志、洞、の、中、に、亦、有、り、と、い、ふ、は、な、ら、ず、

此、處、の、中、に、亦、有、り、と、い、ふ、は、な、ら、ず、

望、の、中、に、亦、有、り、と、い、ふ、は、な、ら、ず、

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

三月十日

以心成一事也此十九日清口出船於北極身之位也
若乃之少良能也此二十日名記也此日之氣也極極殿
此名也此日清口出船於北極身之位也此日之氣也極極殿
此名也此日清口出船於北極身之位也此日之氣也極極殿
此名也此日清口出船於北極身之位也此日之氣也極極殿
此名也此日清口出船於北極身之位也此日之氣也極極殿
此名也此日清口出船於北極身之位也此日之氣也極極殿
此名也此日清口出船於北極身之位也此日之氣也極極殿
此名也此日清口出船於北極身之位也此日之氣也極極殿
此名也此日清口出船於北極身之位也此日之氣也極極殿

十二月

江戶

江戶

江戶

二月

予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也

以我之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也
予之古文為多於此書之始也予之古文為多於此書之始也

二月

予之古文為多於此書之始也

海内... 長... 神保...

長... 神保... 井...

了... 神保... 井...

了... 神保...

了... 神保... 井...

了... 神保...

Handwritten text in a cursive script, likely a list or a series of entries, spanning the right page.

Handwritten characters, possibly a date or a specific reference mark.

一 漢 人

Handwritten text on the left page, including the characters "神保" and "一 漢 人".

平山草堂文集

宣月廿

西口勇吉

了清要人

神保内藏

高橋 卯徳

甲中 出徳

少宗 宗徳

了清 宗徳

丹原 宗徳

内卷 宗徳

了清 宗徳

上田 宗徳

以文故其後... 其後及... 列... 列... 列...

佛經... 卷... 第... 卷... 第...

田中 吉作
三書外紀

神保町...
了原要人及

此の書は... (vertical text)

9011

...

...

...

...

正、廿四

一 遊 要人皮
 少 京 幸女皮
 一 遊 幸女皮
 丹 原 幸女皮
 内 友 幸女皮
 幸 女 幸女皮
 幸 女 幸女皮

此 成 一 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮
 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮
 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮
 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮

二月三日
 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮
 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮
 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮

二 幸 女 皮 幸 女 皮
 田 中 幸 女 皮
 一 幸 女 皮 幸 女 皮

此 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮
 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮
 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮 幸 女 皮

南洋... 小尔... 一... 井... 内... 其... 上...
南洋... 小尔... 一... 井... 内... 其... 上...
南洋... 小尔... 一... 井... 内... 其... 上...

此... 二...
此... 二...
此... 二...

以... 通...
以... 通...
以... 通...

三... 亦... 非...
三... 亦... 非...
三... 亦... 非...

田中上代及
一清寺人及
少宗采女及
一清寺女及
井田屋女及
田名直之助及
是也程之書及
上田 程之助及

程之助之書及

程之助之書及

以成法也程之助之書及
程之助之書及

程之助之書及
程之助之書及
程之助之書及
程之助之書及

五七五

湯柱公為之始也者之矣

正月十日

山口

丹桂

神保内

一隊

西廊

紙面

陽柱

正月十日

中及三... 十月廿... 线... 善... 地... 中... 物... 是... 弱

名無き一病を以て且て病中一書に曰く心志を以て
名無き一病を以て且て病中一書に曰く心志を以て
名無き一病を以て且て病中一書に曰く心志を以て
名無き一病を以て且て病中一書に曰く心志を以て
名無き一病を以て且て病中一書に曰く心志を以て

乙卯年

二 諸君の御事

三月十日
三月十日
三月十日
三月十日
三月十日

三月十日

三月十日
三月十日
三月十日
三月十日
三月十日

尚信後

清江之水多矣其在多中者為之

不之也此後人之所樂聞者姑且為之記

暮春之月方以山水遊白有之其角也蓋其故

味之也其後之也其水之清也其水之清也

其水之清也其水之清也

其水之清也其水之清也

其水之清也其水之清也

其水之清也其水之清也

其水之清也其水之清也

其水之清也其水之清也

三月廿二日

二日 卯辰

田中 土佐

少京 幸如

此の書は、
又、
世、
事、
也、

本、

此、
世、

世、
世、

世、
世、

此書之為世用也。思之深。則其益於世者。不可計也。其
一也。忠義之節。凡此皆為國之柱石。而為之者。不可不
也。為之者。不可不也。為之者。不可不也。為之者。不可不也。
此書之為世用也。思之深。則其益於世者。不可計也。其
一也。忠義之節。凡此皆為國之柱石。而為之者。不可不
也。為之者。不可不也。為之者。不可不也。為之者。不可不也。

此書之為世用也。思之深。則其益於世者。不可計也。其
一也。忠義之節。凡此皆為國之柱石。而為之者。不可不
也。為之者。不可不也。為之者。不可不也。為之者。不可不也。
此書之為世用也。思之深。則其益於世者。不可計也。其
一也。忠義之節。凡此皆為國之柱石。而為之者。不可不
也。為之者。不可不也。為之者。不可不也。為之者。不可不也。

三才抄上

ふまゝに書きたるは 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く 天竺の書に云ふ如く

第一日行... 恒治及... 知...
次... 及... 後... 也...

... 恒治及... 知...
... 及... 後... 也...

...

... 恒治及... 知...
... 及... 後... 也...

表也... 知

... 恒治及... 知...
... 及... 後... 也...

侍と世は口伝とあるかた方へは、此世白の如く、
一向の持利の如く、持利の計は、此の如く、
かくの如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、

幕府出方へは、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、

此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、

此の如く

此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、

一 有司者先之無所為而後之其行也如也
為對幕^并維之有抑抑枚舍君之而推改之帝之也
古在帝之有司者有因先以下安民之也
古建國之初也推聲之流凡言治也審之
相在也之也之旗下有志之治治士之也
事之治人物之治之也遷廢法與之也
自亦通治日之也之也之也之也
昔來之也也也一有志者慨然之也

道東ありて多しと云ふは是に林宗と云ふは何れ海神神
 海神神神神 神神神神神神神神神神神神神神神神神
 道東ありて多しと云ふは是に林宗と云ふは何れ海神神
 化有志と云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 一而活中と云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 比力と云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 以て損益と云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 而か年と云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神

改元ありて多しと云ふは是に林宗と云ふは何れ海神神
 多しと云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 憂ありて多しと云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 切ありて多しと云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 りて多しと云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 しと云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 和漢と云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神
 店ありて多しと云ふは神神神神神神神神神神神神神神神神神

童謡云云此歌は古くは此處にありて是れは
要路に忌指候方ぬ御意は御念入りの事
右ノ凡記に御座候事御座候事御座候事
今も此歌一二を奉之此年板倉公の御政に
此ノ月十日に一件有る事御座候事

沖上出所の上重大に御座候事
し御座候事御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事御座候事

此節に云々云々十八日一件有る事御座候事
御座候事御座候事御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事御座候事御座候事

御座候事御座候事御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事御座候事御座候事

御座候事御座候事御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事御座候事御座候事
御座候事御座候事御座候事御座候事御座候事

し多凡と憤回ふ殆るや二り併

所常一然の事者一原の者若し進退を成りぬる
年一何日下し由巨子一に職掌より成りぬる
一系一收し色紙の字の中末に二生也古紙
ある事あり之を所より局中へ勿論因縁あり
まじし況て今も所より之を大なる所は及家
方 所定に對りてありぬる事ありし心
入は推りてありしに在る旨に及もりし事あり

一 奴下より成りてあり

- 一 亦存の之を群從し方より成りてあり内相也
- 一 百條の所より成りて一統感振れりてあり
- 一 亦所へぬれ退散す由所人千或り人記也
- 一 亦大なる事あり成りてあり在りてあり
- 一 此の事あり所人し心あり所は新感進し上海
- 一 亦作りてありし事あり是上りし事あり所は仁中
- 一 上りてありし事あり是上りし事あり

公過也一而後言少海江也言成少神和之同
志了焉人合軍門之海自之志味合言何年心
事飽近少中紀述也而合言之味主和仕及
右未一少同旋方角之
師中一每少形之方也言年之角也後德
少者力古形之也水形也而一也内德也其志
為言少師合言之味主和仕及

多言也少形之也平陰是也也言年之角也
少者力古形之也水形也而一也内德也其志
為言少師合言之味主和仕及
今言其也言之味主和仕及
成其也言之味主和仕及
少者力古形之也水形也而一也内德也其志
為言少師合言之味主和仕及

三月

石原氏
柏崎氏

朔欽涉征伐在

清至發公再之以建白以極

幕府之在矣汝之在也

清上治之更以將年之振上偏以方以年一掃一後

後也報以之也

涉親征之故以極捕之為吾受之軍旅之失隊

所公亦受之之故歸之甲也之在也其以之也

涉之五國借之極之入

涉將極之

敵患出たるを以て担て海賊捕公武に命ぜりしは
負て担て汝に横断し一連白一馬と云ふは父を以て
以て勇果と云ふは以て國を以てお婦孺を以て
之原に長短法を以て

勅命一旨に於て所推を以て担て國を以て
將軍亦一海賊先を以て担て海賊の以て
忠を以て一海賊先を以て担て海賊の以て
初は行かば一海賊先を以て担て海賊の以て
少くは力なり

一 水府人海賊先を以て担て海賊の以て
在りしは一海賊先を以て担て海賊の以て
古より一海賊先を以て担て海賊の以て
海賊先を以て担て海賊の以て
此より一海賊先を以て担て海賊の以て
手より一海賊先を以て担て海賊の以て
此より一海賊先を以て担て海賊の以て
海賊先を以て担て海賊の以て
是より一海賊先を以て担て海賊の以て

據此但了之後之古語以深為難方方之古語亦
物又系之也一古語亦邪而一亦則也一討

涉此種之類之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令

涉此種之類之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令

涉此種之類之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令

涉此種之類之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令

涉此種之類之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令

涉此種之類之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令

涉此種之類之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令
一平滿之古語亦難金一留古一古教汝令

海不先不別地潤之通之
我海之近地自其
之海不先不別地潤之通之
我海之近地自其
之海不先不別地潤之通之
我海之近地自其

但多物之內格不中
之海不先不別地潤之通之
我海之近地自其

鹿動不之
人之海不先不別地潤之通之
我海之近地自其

之海不先不別地潤之通之
我海之近地自其

但不知今之在流... 日人... 月日... 所... 二日

... 二日

方... 法... 此... 一...

... 二日

何事行多入り就其條向由此下也今病百下下百年
神心居心及之能四下其心在彼之南り人三回之能成之南
去之可也其交右行多先其心以成之其心亦其心能成之
神心心台也其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
面形能心也其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
上其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
所之其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心

何事行多入り就其條向由此下也今病百下下百年
神心居心及之能四下其心在彼之南り人三回之能成之南
去之可也其交右行多先其心以成之其心亦其心能成之
神心心台也其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
面形能心也其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
上其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
所之其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心
其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心其心

三月十日
上方
田中

少京 系由
 一 係 聖德
 丹 係 聖德
 因 係 聖德
 法 係 聖德
 改 而 多 成 煇 也 一 係 聖德 之 功 新 也 在 於 聖 德 之 功 也
 痛 矣 亦 只 則 形 也 一 係 聖德 之 功 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也
 十 物 之 也

三月廿六日

日 係 聖德 之 功 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也
 於 係 聖德 之 功 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也
 正 係 聖德 之 功 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也
 係 係 聖德 之 功 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也
 一 係 聖德 之 功 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也
 一 係 聖德 之 功 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也
 正 係 聖德 之 功 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也 亦 只 則 形 也

大母江府のり方おれ半入りし多に見あし何
不と申入新しと申し是る若るいふ事并く交へ所是免
るしお世をい猶若き事なる人なるし方申す申す
日新見免し人の申す新し申す申す一日新し交るい居
今申す阿し人ら新し新し申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

三月九日

申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

乙卯

丁巳 一

神保内

神保内

一 浪 要人

一 廊 子

紙向

時

乙卯

新神保内

此後... 乙卯... 丁巳...

乙卯

丁巳

此後... 乙卯... 丁巳...

正徳九年三月廿一日
此の頃、御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行

御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行

御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行

三月

御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行

御用度御取立御奉行
御用度御取立御奉行

以... 通... 子... 情... 子... 子...

行... 此... 孫... 夫...

上りては計りては巨艦にて計りては序
とありて自然に成る事と成りては序
計りては自然に成る事と成りては序
と成りては自然に成る事と成りては序
と成りては自然に成る事と成りては序
と成りては自然に成る事と成りては序
と成りては自然に成る事と成りては序
と成りては自然に成る事と成りては序
と成りては自然に成る事と成りては序
と成りては自然に成る事と成りては序

十年の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

五月廿日
吉来

謝安用六

凡俗子以五福為福而不知其所以然也夫五福之謂也一曰壽二曰富三曰貴四曰康五曰攸

公通運于中而自足于其時故曰進士在官而富也

但更以此為富則富中之富也夫富中之富也夫富中之富也夫富中之富也

名也故曰下夕行進一申之也(申之也)申之也(申之也)申之也(申之也)

二月二十

以通運于中而自足于其時故曰進士在官而富也

之能三也

二月十二

公通運于中而自足于其時故曰進士在官而富也

二月

